

[評論]

政治とカメラ

——知られざるロシアカメラの秘密——

眞瀬 勝康

2003年9月、キャノンは価格を10万円代前半に抑えた普及型デジタル一眼レフカメラ（デジタルEOS-Kiss）を発売した。2000年ころまでにデジタルカメラはプロ用高級機と初心者向けコンパクトカメラの市場を押さえるにいたっていたが、これによって一眼レフカメラ市場にも食い込み、アナログ銀塩カメラがデジタルカメラに完全に置き換わる時代がいよいよ到来した。デジタルカメラの制覇は、おりしも薄型テレビ、DVDレコーダーとデジタルカメラからなる「新・デジタル三種の神器」の大ブレイクに象徴される今回の景気回復が作り出した記念すべきエピソードといえよう。

デジタルカメラは写真撮影の究極的自動化の終着点である。デジタルカメラはアナログカメラのように現像・焼き付けを行わなくても撮影終了後に即座に映像を確認できる。さて、写真撮影自動化の流れは1970年代のAE化（露出自動化）、80年代のAF化（自動焦点化）をとおして、シャッターを押せば、写真は誰にでも簡単に写せるようになった。誰もが写真を写せて誰もがカメラを買えるようになったのは日本カメラ産業の功績である。カメラ技術がレンジファインダー式カメラから一眼レフカメラへ転換する中で1970年代に世界カメラ産業の覇権を握った日本カメラ産業は、以後、世界カメラ市場において揺るぎない繁栄を謳歌した。こうしてアジアで製造した日本カメラ会社の販売するカメラが世界中の人々によって使用されている光景が日常的になってすでに久しい。

ところで1980年代に始まったカメラの自動焦点化が完成する中で、日本の写真愛好家の世界ではカメラの技術革新に逆行する奇妙なブームがまきおこった。思えば自動焦点カメラの普及によりカメラはシャ

ッターさえ押せば誰でも簡単に写真がとれるようになった。これはハイアマチュアの世界でも同じで高級一眼レフカメラの AE・AF 化は、苛烈な技術開発競争の展開する日本のカメラ市場ではおしとどめようのない流れであった。そしてデジタルカメラは写真撮影に最後に残された即時性の難問を解決した。それは撮影した「映像」をその場で確認できるようにした。他方、デジタルカメラが普及する以前からカメラならぬフィルム式カメラ（「写ルンです」）さえ出現し、写真撮影の徹底的大衆化が進行した。加えてカメラ付き携帯電話の普及によって、今やフツウの人は「カメラ」を使用しない時代に突き進んでいるかのようだ。

こうした流れにおもしろくないのがハイアマチュアカメラ愛好家、好事家の一部である。彼らは全自動カメラに対してマニュアル・カメラを、プラスチック製カメラに対して金属製カメラを愛玩した。その行き着く先は機械式カメラの頂点に君臨するライカである。彼らは言う。「機械式カメラは写真を写すのに不便だから良い！」と。カメラの自動化が行き着くところまで行き着き、デジタルカメラが実用の域に入った時代にいわゆる「クラシック・カメラ」ブームがおきた。こうしたブームを背景に赤瀬川源平、秋山祐徳太子、高梨豊氏らによる「ライカ同盟」の面々や田中長徳氏などからなる機械式、手動式カメラの使い手が脚光をあびた。

さて、日本の写真界では、すでに戦前よりライカ・カメラの熱狂的支持者の一群がいた。戦前から戦後にかけて木村伊兵衛や土門拳氏などの有名写真家が牢固としたライカ信仰を作っていた。しかし、ライカは庶民にとって高嶺の花であった。戦前の「ライカ 2 台で家 1 軒が買える」との逸話は論外としても、1960 年代後半までに世界第 2 位の経済大国になっても長らく 1 人あたり GNP では 20 位前後であったので、わがカメラ愛好家にとって依然としてライカは「高嶺の花」であった。ところが 1985 年プラザ合意を転機に急激な円高となると、日本の 1 人あたり GNP がアメリカのそれを凌駕するようになって、ライカは一挙に身近なものになってきた。こうした動きはちょうど女性

のブランドブームの始まりと機を一にしているのである（今や女子学生ですらエルメス、グッチなどのハンドバッグは日常的に使用するブランド品になっているのである。田中康夫のブランド小説『なんとなく、クリスタル』（1981年）は、こうした時代を背景に登場したのも今やなつかしい）。こうしてバブル前後にライカはおじさんのブランドになったのである。

技術の流れに逆行する「クラシック・カメラ」ブームの中で一部の好事家、愛好家は、使いにくさと個性的な写り（シャープでない写りと読め！）からロシアのカメラとレンズに注目した。日本で旧ソ連カメラを使いこなした嚆矢は『間違いだらけのカメラ選び』（1993年）で一躍カメラ評論の分野で売り出した田中長徳氏であろう。田中氏はウィーンに長期滞在したさいに（1973～1980年）旧ソ連カメラに出会った。彼によれば旧ソ連レンズはよく写り、実用上問題なかった、そうである。それにレンズマウントがライカLマウントと同じなので高価なライカレンズの代用品になった¹⁾（ライカの広角、望遠レンズは非常に高価でしばしばライカ・ボディ以上の値段になった）。ライカ、コンタックスなど往年の名カメラ、名レンズのコピーである旧ソ連製カメラ、レンズが二束三文でウィーンのカメラ屋に一山いくら（数千円）で転がっており、それで田中氏はウィーン市街をスナップした、という。

この他にも旧ソ連のカメラ、レンズの愛好者、支持者はたくさんいる。クラシックブームの中で伝統的な西側機械式カメラにも飽きた一群が旧ソ連製カメラとレンズに注目した。折しもソ連崩壊である。ソ連から新品、中古を含めて大量のカメラ、レンズが日本へ流れ込んできた。珍しい物好きの彼らはそれに飛びついた。彼らの言い分は「使いつらい！（この場合には肯定的評価になる）が、安くて、よく写る」、である。

かくして田中長徳氏の『ロシアカメラがむせぶ夜は』（グリーンアロー、1999年）を皮切りに、中村陸雄『ソビエトカメラ党宣言』（原書房、2001年）日本カメラ社ムック『ハラショー』（2003年）、学研『ロ

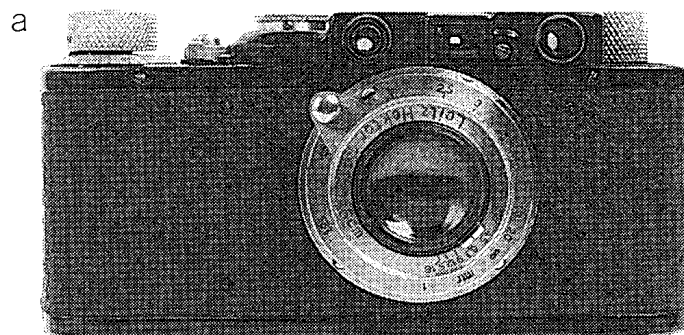
シア製カメラ&中国製カメラ攻略ガイド』(2003年)などなど目白押しである。

しかし、私はこれらロシアカメラ愛好家の無邪気なロシアカメラ礼賛には素直に同調できない。安価な旧ソ連のカメラ・レンズは「鉄のカーテン」内の東欧諸国や発展途上国が市場であったために我々にはよく知られていなかったが、旧ソ連は知られざるカメラ生産大国であった。その源流はライカ DII 型 (図 1 a) のコピーから始まったのであった。

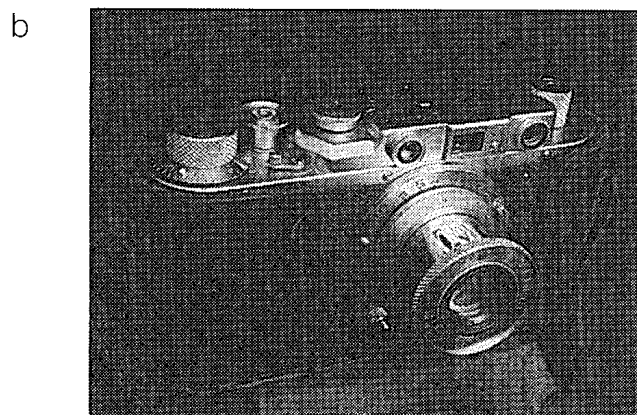
旧ソ連では何時、どのようにしてライカ・コピー機が生産されたのであろうか？ 1932年2月にドイツでライカ DII 型が開発されるや同年10月には早くも同コピーのフェッド I 型 (図 1 b) が試作されたことは周知の事実である。また同機の標準レンズとして搭載された

図 1

ライカ DII 型



フェッド I 型



インダスターは、これまたエルマー（標準5センチ F3.5）のコピーであった。旧ソ連カメラ愛好家の中には第2次世界大戦でナチス・ドイツを打ち破り、人工衛星打ち上げに成功したソ連の技術水準をもってすれば、それが可能であることに何らの疑いも持っていない。むしろそうした疑いを持つことにイデオロギー的な嫌悪感さえもつのであった。しかし、試作品とはいえわずか半年でコピーに成功できたのはあまりに早すぎるのではなからうか？ 設計図を入手し、現物を分解できたにしても、カメラやレンズのような精密光学製品はそれほどたやすくコピーできるものではない。

戦前の日本でも和製ライカを生産しようとして精機光学研究所（現キャノン）がカメラ生産に成功しているが、カメラ生産にめどを立て会社設立（1933年）してから1年（研究年数はかぞえていない。会社設立以前にカメラ製造に向けて研究している）はかかっている。それもレンズは日本光学から提供を受けて、である。このカメラ（キャノンカメラ）は「フェッド」のようなライカのデッドコピーではなかった。また戦後、日本光学はドイツの二眼レフカメラを参考にカメラを試作しようとしたが、シャッター技術で躓いた。当時の日本にはコンパー型シャッターを作れる技術がなかった、という。レンズ生産も難しい。原料となる光学ガラスの調達からその生産、さらにレンズの研磨は難事を極めるのである。わが日本カメラ・レンズ各社は製造するにさいしてライカやツァイスを参考にしたが、これらのデッドコピーはしていない。というより、当時の日本の技術水準ではデッドコピーをするにはあまりにドイツの技術水準が高すぎたからである。かくして旧ソ連が独力で製造に成功したといわれるライカ DII型のデッドコピー機、フェッド I 型の生産には謎があまりに多い。

戦前の独ソ関係はヒトラーの政權掌握後の一時期を除き必ずしも悪いものではなかった。ヒトラー・スターリンの関係においても国益に合致さえすれば、「イデオロギー的に」不倶戴天の敵であっても悪魔の抱擁さえしたのである。ソ連は第2次大戦で連合国側にたち、戦勝国になったが、第2次大戦勃発のさいにヒトラーと悪名高い独ソ不可

侵条約を締結してナチス・ドイツとともにポーランドを分割占領し、バルト三国を併呑したのはソ連邦であった（もっともスターリンのおかげで「ミノックス」はラトビアからドイツに疎開できたが）。

ヒトラーの政権掌握以前の独ソ関係はまさに蜜月関係といってもよかった。資本主義列強は旧ソ連を孤立させ、隔離・封鎖していたのに、ドイツは1922年にはいち早く独ソ通商条約を締結し、1926年には中立条約を締結していたのであった。この結果、ヴェルサイユ条約で軍備を制限されていたドイツの軍部は、密かにソ連領内で軍事技術の開発および将校の訓練を行っていた。他方、社会主義革命に成功したソ連は資本主義国の包囲の中で国際社会の窓口をドイツに求めている。

このような両国関係の親密性を考慮するとライカの製造技術が何らかの形で秘密裏にソ連に移転されていたと推理しても不思議ではなからう。今日のように市場が開放されておらず、ドイツにしてみればライカの製造技術が流出し、ライカ・コピー機が製造されたにしても鉄のカーテンの中に閉じこめられていれば世界市場に輸出されるおそれはなかった、と思われる。

旧ソ連カメラの謎解きはそればかりではない。もっと重要なことは飢餓に苦しんでいた当時のソ連社会において、カメラを誰が何のために使用したのかである。1930年代のソ連カメラの需要家は誰か、という問題である。ソ連において一般市民がカメラを使用するようになったのは第2次世界大戦の戦禍から立ち直り、雪解けの始まった1950年代後半以降のことである。となると、戦前のソ連でカメラは誰が何のために使用したのか、という疑問が残るのである。

1991年のソ連崩壊以降、国の文書保管庫からおびただしい資料が流出し、その中にスターリンによる粛清時代の尋問資料、強制収容所に関する資料が明らかになった。これら粛清資料から思わぬ事に気がついた。尋問調書には容疑者の写真が2枚添付されていた事実である。スターリンの粛清といってもむやみに容疑者をでっち上げ、やみくもに収容所に送り込んだのではない。容疑事実を認めさせ、「合法的」に有罪にしたのである。そのときに容疑者の写真を正面と横顔の2枚

撮影し、添付したのであった。犠牲者は 2,000 万人、といわれている。またソ連では身分証明書の携帯が義務づけられていた。これは国民の移動の自由を制限する目的も有していた。これにも写真が貼付されている事は言うまでもない。

こうしてみると内務人民委員部で粛清にからんでの写真撮影に相当数の撮影機材が必要にされたことは容易に想像される。また身分証明書は一定年齢に達したソ連国民が対象になるから証明写真にこれまた担当政府機関でカメラが必要にされたであろう。共産党の党员証にだって写真が貼付された。社会主義とは、ある意味で身分社会であり、身分証明がどこでも必要であった。身分証明に写真は欠かせない。「ライカ式カメラ」は、これら膨大な写真撮影需要に応えたに違いない。これは資本主義社会で写真愛好家がスナップや風景写真撮影を楽しむのとは全く異なる光景である²⁾。

そもそもライカは映画用 35 ミリフィルム³⁾を写真撮影に転用し、写真撮影の簡便性、速写性を実現したのであった。現在ではライカ式カメラは当たり前すぎて、その革新性に気づきにくい。しかし、ライ

旧ソ連内の強制収容所所在地（刑務所・精神病院施設を含む）



カ以前のカメラがブローニーの大判フィルムや乾板を使用していたのに比べると 36 枚撮りという撮影枚数の多さは際だっている。また常用レンズの名玉「エルマー」5 センチ F3.5 標準レンズは十分に室内撮影が可能な明るいレンズであって、フラッシュを必要としない。加えてカメラボディの小型化は際だっていた。旧ソ連はこの革新的な小型カメラをコピーしたのであった。こうしてライカコピー機とコピーレンズはソ連国民や粛清の対象者を次から次へ効率的に撮影していったのではなかろうか？

その意味でソ連初のライカコピー機生産工場が全ロシア非常委員会（チェッカー）の創設者にして KGB の前身、国家保安部（GPU）^{ゲーベウー} 初代長官であるジェルジンスキー記念工場（ウクライナ共和国ハリコフ市）⁴⁾ 製造であり、1932 年に製造の始まったライカコピー機フェッド I 型が、そのフェリックス・ジェルジンスキーの頭文字をとった略称であるのは単なる偶然の一致ではない。カメラの需要家が他ならぬ秘密警察であったからなのである。こう考えてみるとソ連カメラは粛清と人民管理に使用された社会主義時代の負の遺産と考えてしくはない。カメラは人民弾圧・人民管理の道具であった。旧ソ連のカメラからは社会主義独裁下で弾圧され、抑圧された人民のうめきが聞こえる。ロシアカメラ産業は粛清の血の海を栄養にして発展したことを思い出すべきである。

（注）

- 1) これは朝鮮戦争の時に「ライフ」のカメラマンがドイツ製レンズに匹敵する日本光学のレンズを「発見」した故事と似つかわしい。ニコンのレンズが注目された時代（1950 年代）に、ライカはカメラ界の王者で世界に君臨していた。それから見れば日本のカメラ・レンズは駆け出しの新興勢力も良いところであった。ところが、田中氏がウィーンで旧ソ連のカメラと遭遇した時代はこれと全く異なる。カメラの覇権は日本カメラ産業の手に握られており、技術革新を停止したライカはすでに凋落していた。ヨーロッパでも人々が購入したカメラは、ニコンやキャノンなど最新式日本製カメラであった。旧ソ連カメラとレンズは単なるライカの代用品（旧式技術と読め）でしかなかったのである。

- 2) ナチス・ドイツのユダヤ人迫害は、精緻な人種法にもとづいてドイツ国民からユダヤ人を選別した。その延長上に、600 万人ともいわれるユダヤ人大虐殺があった。身分証明にカメラが大活躍したのは旧ソ連と同様である。ちなみにスティーブ・マックイーン主演の映画『大脱走』(1963 年)で捕虜収容所から脱出するさいに、身分証明書を密造していたシーンがあったが、そのさいに使用されていたカメラはライカであった。
- 3) ライカが映画用 35 ミリフィルムを転用したのは旧ソ連のカメラにとって好都合であった。旧ソ連では社会主義の宣伝、扇動に映画産業が重視されたので数多くの映画が製作された。その中で、エイゼンシュタインによる『戦艦ポチョムキン』は映画史上の傑作となったことはよく知られた事実である。映画フィルムがふんだんに使用されていたことから写真撮影用のフィルムの心配はなかったのである。
- 4) フェッド I 型が試作に成功した 1932 年にはウクライナなど穀倉地帯で強制的食料徴発によって大飢饉が発生し、それは 1934 年まで続いた。旧ソ連では人民弾圧・人民管理という国家目的のために「人民」の飢餓はそっちのけでカメラ製造が行われていたことに戦慄せざるをえない。

参考文献

荒川龍彦『明るい暗箱』(朝日ソノラマ、1975 年)

神尾健三『めざすはライカ』(草思社、2003 年)

ステファヌ・クルトワ、ニコラ・ヴェルト、外川継男訳『共産主義黒書』(恵雅堂出版、2001 年)

Avraham Shifrin, *The First Guidebook to Prisons and Concentration Camps of the Soviet Union*, Bantam Books, 1982